



# 鉄斎

— 多彩な画題 —

多様な画風 IV —

平成23年10月4日〔火〕—12月11日〔日〕

前期 10月4日〔火〕—11月6日〔日〕

後期 11月9日〔水〕—12月11日〔日〕

10時〜16時 月曜日休館 但し10月10日は開館 翌日休館



牛祭図  
 慶應記獨東准許術才蒙来鬼面嚇者  
 明治三十一年十月十日  
 鐵斎外史畫所題

最後の文人画家富岡鉄斎（1836～1924）の画業は20代後半から89歳で没するまで60余年に及び、描かれた作品は優に一万点を超える。そうした作品の最大の特徴は何といても画題の多彩なこと、画風の多様なことであろう。

生涯儒者として学者としての矜持をもって生き、文人の理想とする「万卷の書を読み、万里の路を行く」を実践した鉄斎は、画題の多くを読破した和漢の万卷の書から得、日本全国をくまなく旅して画囊に蓄えた心象風景は数々の傑作を生んでいった。また鉄斎は特定の師につくことなく古今の和漢の名画を模写し、筆法、技法、彩色、構図などほとんどすべてを独学で修得した。こうして生まれた鉄斎独自の画風確立にいたる過程は、遺された膨大な「鉄斎の粉本」と呼ばれる模写類によって理解することができる。

では学者を自任する鉄斎が考証と研究に基づいて描いた作品にはどのようなものがあるのだろうか。

中国に深い憧憬の念をいだいていた鉄斎にとって中国の古典籍から画題を求めた作品が多いのはごく自然なことである。生涯尊崇の念を持った北宋の文人蘇東坡に題材を得た《東坡閑居図》(No.67、69)をはじめ《山高水長図》(No.50)・《武陵桃源図》(No.75)等々があげられる。

日本の歴史や故事逸話についても記紀万葉はもとより多くの歴史書をひもとき、該博な知識を得た。また京都の伝統文化に深く係わる法衣商に生まれ育ち、国学者で国体神道を説く野之口隆正に学んだ鉄斎にとって、明治の混乱期に由緒ある神社が荒廃し脈々と続いてきた伝統が継承されず裡靡れていることは許しがたいことであった。明治9年（1876）5月に大和石上神社（奈良・天理市）少宮司に、同年12月に和泉大鳥神社（大阪・堺市）大宮司に任命された鉄斎は同14年に辞職するまで、荒廃していた両神社のみならず、近隣の由緒ある神社の復興にも心血を注いだ。

日本の伝統的な年中行事や歴史的に名高い事跡や逸話に強い関心を抱き、京都の八坂神社の祇園祭、鞍馬の竹伐会式、奇祭として知られる今宮神社のやすらい祭や太秦牛祭、あるいは筑摩神社（滋賀県米原市）の鍋冠祭などの祭礼を題材にした鉄斎が、とりわけ繰り返し描いた北野大茶湯図と牛祭図を取り上げてみたい。

**北野大茶湯図** 歴史に名高い北野大茶湯は豊臣秀吉が天正15年（1587）10月1日、京都北野天満宮と社頭の松原で開いた大茶会で、「公家・大名・茶人に加えて若党・町人・百姓さらに唐国の者まで有りあわせの道具を持って参会せよ、秀吉自慢の名物を見せ、自らのお点前にて御茶下さるべし」との触書を出して諸人の参加を呼びかけ、これに応じて茶室は八百余、次第不同で建てられ、参会者は一千余人に上ったといわれる。当日は秀吉・千利休・津田宗及・今井宗久が亭主をつとめ、名だたる名器で茶を供した。趣向をこらした茶席を見物した秀吉は、美濃の一作（華）の松葉かこいの席と京都のわび茶人へらかん朱塗りの大傘の席をことに賞美した。まさに空



90 摸浮田一蕙筆 北野大茶湯図巻（部分）



26 北野大茶湯図

前絶後の大茶会であった。千利休やノ貫などの茶人にまつわる作品も多い鉄斎にとって、太閤北野大茶湯会も大いに関心を寄せるものがあった。

鉄斎は明治15年（1882・47歳）に北野天満宮が所蔵する浮田一蕙の描いた《北野大茶湯図》を摸写（No.90・『鉄斎研究』19-1）する機会を得た<sup>註1</sup>。浮田一蕙（1795～1859・宇喜多とも。名は公信、のち可為）は江戸後期の復古大和絵の画家で、勤王家としても知られ、青年時代の鉄斎は一蕙のもとに出入りし、また大和絵の手ほどきを受けたともいわれている。思想的にも画技においても影響は少なからぬものがあったであろう。鉄斎は縁のある一蕙の原画を写すにあたり、原画をほぼ中央で二分し上半分を右に、下半分をそれに続けて写し、卷子本とした。摸写に続けて「北野大茶湯記」と書して『群書類従』『北野大茶湯之記』・『甫庵太閤記』・『雍州府志』・『茶話指月集』に載る茶会に関する記事を抄録して、それは鉄斎の研究の成果を示している。次にこの摸写をもとにして制作された作品を紹介する。

先ず明治23年（1890・55歳）に描かれた卷子本の《北野大茶湯図巻》（清荒神清澄寺蔵・『鉄斎研究』1-11）には、80歳の鉄斎が再観した時に書した奥書がある。それには「…この図は茶事秘録読本、或ハ浮田一蕙翁之図を斟酌して写せるにて、余は此茶会図に於ては、頗研究せるも…」とあり、かつて自身が北野大茶湯について大いに研究したことを識している。一蕙本の摸写をもとにしてはいえ、背景の山々は省略され紙屋川を中心に松林の中の茶席で茶を楽しむ人々が、そして最後には北野神社の鳥居と大屋根が描かれていて、筆致も自由で力強く、鉄斎の斟酌した北野大茶湯図といえる作品である。

50～60歳代の作と考えられる《北野大茶湯図》（参考1・『鉄斎研究』51-11）

は、横長の画面を縦長の掛幅に配し、遠景には大きな山を描くなど、奥行きを感じさせる作品となっている。また今回展示の《北野大茶湯図》（No.26・『鉄斎研究』18-4）は、明治40年（1907・72歳）に風呂先屏風として描かれたものを後に額に仕立て直したものであるが、先の卷子本同様、横長の画面にやはり同じ場面が描かれる。金地に施された彩色が美しく映え、松の木の傾斜と紙屋川の流れが画面左から右への動きを生み、茶会の華やかさを伝えて余すところがない。以上3点の北野大茶湯図は一蕙本をもとにしながらも形状を変え、次第に紙屋川を挟む一蕙本の最後の部分に焦点を絞りを絞っていき、賛には高札と定書が書されている。それらの画風は若い頃に伝統的な大和絵の画法を学び、のちに「鉄斎の大和絵」といわれる画風を展開するに至る過程を追うことができる作品群といえる。

大正6年（1917・82歳）に鉄斎は帝室技芸員を拝命するが、その祝賀に贈る菓子を作るにあたって、虎屋が秀吉に調進したという古い記録を調べ、同じ型をつくらせた。期待に応えてできあがりの菓子を持参すると鉄斎は非常に喜び、菓子の折箱の蓋いっぱいに《北野大茶湯図》（虎屋蔵）を描いた。虎屋京都店主人黒川魁亭（名は正弘）と鉄斎との関係を物語る作品である<sup>註2</sup>。

同7年の《豊公茶会図》（『鉄斎研究』61-22）は賛に「豊公茶譚」とあり、この図も他の作品と図様はほぼ同じとはいえ、もはや茶会の風景は鉄斎の中で昇華され自由でのびやかな晩年の作風を示す作品となっている。

すべて着色で描かれその場面もほぼ同様であるこれらの作品を比較すると、鉄斎の画題の解釈や研究の跡とともに、年を重ねるに従って変化していく画風をたどることができる。

**太秦牛祭図** 鉄斎が神職につき、当時荒廃していた神社の復興に奔走したことは先に触れたが、祭礼を復興することも大きな課題であった。

京都の太秦広隆寺の牛祭は平安中期の天台宗の僧源信（恵心僧都）に始まるといわれる祭礼である。それは陰暦9月12日夜に行われる奇祭で、応永19年（1412）の祭文が伝わり、祭の様子は『都名所図絵』（安永9・1780刊）にも載る。祭の主旨は天下泰平・五穀豊穰・悪病退散・家内安全を願うもので、祭では仮面を付けた主神の摩多羅神が牛に乗って赤鬼と青鬼の面をつけ三叉の矛を持った四天王を従え、従者は松明をふり立て鉦や太鼓を叩いて境内を練り歩き、薬師堂前で祭文を読誦したあと堂内に駆け込んで終わる。江戸後期の京都の絵師横山華山、浮田一蕙、冷泉為茶などが祭礼図の好画題として作品を遺している。



参考1 北野大茶湯図  
（『鉄斎研究』第51号より転載）

鉄斎は800余年連綿と続けられてきたこの牛祭が廃仏毀釈の影響を受け明治維新の頃以来中絶していたことに心を痛め、同20年（1887）10月、鉄斎自ら復興趣意書をつづり「世に神事祭礼多しといえども、古雅奇異なるのは、この祭を第一とする」とし、「これは世間尋常祭礼を行うと同視すべきにあらず」と諷い、中心となって尽力して祭礼の日を陽暦10月12日とし再興させた<sup>註3</sup>。そして同25年（1892）には「古牛祭図解」（『京都美術協会雑誌』第二号）という一文を発表し、「洛西太秦広隆寺古代牛祭之図。鉄斎学人摸」と書いた図を付し、牛祭の伝来を説明し、最後に「本号に載する図は牛祭古画卷中の一段を摸写せしなり。原本の筆者は知れざれども応永九年の年号あれば其の頃の土佐家の筆なるべし。方今の牛祭とすこしく其風変れり」と古と復興された今の牛祭の違いを述べている。

牛祭が鉄斎等により復興された頃の作になるのが《牛祭図》（No.15・『鉄斎研究』32-18）である。牛にまたがる摩多羅神を中心に先導する従者や赤鬼青鬼を正面に配する構図からは、面や祭具を調査し記録した《牛祭図描き帖》（No.91）が活かされているようである。賛には自作の和歌“あやしやなとしふる寺のまつりとて 牛みつ時に鬼のいつらむ”がある。こうした正面観で捉えられた牛祭図は繰り返し描かれた。

鉄斎が大和絵を学んだといわれる浮田一蕙に牛祭の大作が知られる。鉄斎は一蕙の牛祭図（参考2）を摸写していて、祭の復興から10年を経た明治30年の牛祭の日に《太秦牛祭図》（No.19・『鉄斎研究』39-10）を描いた。中央に高い松の木を配しその下を通過する祭の様子が描かれるが、鉄斎は一蕙本の高い木や牛にまたがる摩多羅神などその図様を取り入れながらも、画面右に木を移し、祭の進行方向を逆にするなど工夫の跡が見られ、祭の喧噪を十分に感じさせる作品となっている。賛には自作の漢詩「老爺<sup>ろうや</sup>扮飾<sup>はんしやく</sup>す異形の姿。半夜牛に乗りて警詞を誦す。記し得たり東涯、物子を評せしこと。鬼面を蒙り来りて童児を嚇す（原文漢文）。」<sup>註4</sup>（大意：牛祭では摩多羅神を祭るが、その祭儀として老人が異様な姿に装い、夜中に牛に乗って、邪魅をはらい、寺物を盗むやからを警める祝詞をあげる。そこで思い出すのは、伊藤東涯が获生徂徠の文を評して、たとえば鬼臉（鬼の顔）を着けて嬰兒を嚇すが猶し、と言ったことである。）を書している。この漢詩は同32年には《牛祭詩画》（『鉄斎研究』29-8）と題される二曲一隻の屏風にも用いられた。右隻にNo.15と同様の構図の牛祭図を描き、左隻に「観牛祭」と題して上記の詩を書すもので、当時親交のあった愛媛県八幡浜の清水尚古齋（名は岩太郎）と牛祭を観た翌日に制作したことが識されている。



参考2 摸浮田一蕙筆 牛祭図

最晩年の88歳で描かれた《太秦牛祭図》（『鉄斎研究』63-22）は画面いっぱい祭の様子を描くが、他の作品とはいささか趣を異にする。それは賛文に江戸後期の漢詩人梅辻春樵の牛祭を詠んだ詩の一つを録し、図は古きに仿うとしているとおり先にあげた「古牛祭図解」の図を元に描いているのである。箱書には広隆寺聖徳太子千三百二十年遠忌日に描き、寄附としたことを識している。

牛祭は鉄斎が深く係わって復興させた祭であり、そのために祭礼について検証を重ねたことは作品に書かれた詩や文から知ることができる。さらに晩年に至ってもなお新たな資料から作品を制作していることなどは、この祭礼に対する鉄斎の関心の深さの表れといえよう。こうした作品が見る者に親しさと楽しさを感じさせるのもまた当然である。

自身の絵にはすべて典拠有りとした鉄斎は、関心を持った様々な事跡を研究し考証を重ね多彩な画題を得た。そして画題により画風もまた年を経てなお多様に展開していった。画題と画風はともに深く係わり合って独自の作品を生み出していったのである。シリーズ4回を数える本展では、初期から晩年までの「多彩な画題と多様な画風」を堪能していただける作品を選びすぎた。鉄斎芸術の特質をご理解いただければ幸いです。

（奥田素子）

〔註〕

1. 浮田一蕙の《北野大茶之湯図》については別役恭子氏の浮田一蕙の「北野大茶之湯図」（下）（『茶道雑誌』59-10 淡交社 1995）を参照されたい。
2. 横川毅一郎「鉄斎翁生立ちの記」（『中央美術』第102号 1924）
3. 牛祭は復興当時から10月12日に執行されていたが、近年関係者の要望により10月10日に変更された。摩多羅神や赤鬼、青鬼のつける紙の面は鉄斎がデザインしたものを祭の都度つくり用いる。現在は諸般の事情により中断されている。
4. この漢詩は筆録「無題詩文集」（清荒神清澄寺蔵）に「十月十二日夜観太秦牛祭」と題して所載されている。

## 《出品目錄》

番号	名 称	制 作 年	年 齡	寸 法	材 質・彩 色	頁 数	
1	名勝十二月図	慶応2	1866	31	133.3× 63.0	紙本 淡彩	1幅
2	奴図 蓮月尼歌賛	慶応3	1867	32	113.8× 47.0	紙本 淡彩	1幅
3	隠逸畸人図	明治1	1868	33	141.0× 51.4	紙本 淡彩	1幅
4	米点山水図	明治2	1869	34	173.6× 97.5	紙本 墨画	1幅
5	小楠公弁内侍像	明治2	1869	34	113.5× 39.9	紙本 着色	1幅
6	青緑山水図	明治2	1869	34	143.4× 43.4	絹本 着色	1幅
7	砧打図	明治5	1872	37	125.8× 47.2	紙本 淡彩	1幅
8	雪中牡丹図			30代	123.3× 36.2	紙本 淡彩	1幅
9	天恵八音図	明治15	1882	47	132.5× 63.5	紙本 淡彩	1幅
10	天鈿女命神影			40代	126.0× 42.8	絹本 着色	1幅
11	空翠湿衣図			40代	144.2× 78.5	紙本 墨画	1幅
12	古木竹石図			40代	145.0× 38.5	紙本 淡彩	1幅
13	層巒積翠図			40代	138.1× 40.2	紙本 墨画	1幅
14	楠妣庵図	明治27	1894	59	140.4× 49.6	絹本 着色	1幅
15	牛祭図			50代	133.3× 31.4	紙本 淡彩	1幅
16	獅子舞図			50代	128.1× 50.7	紙本 着色	1幅
17	菖蒲故事図			50代	124.8× 25.0	絹本 着色	1幅
18	鳩峰・五瀬・春日三景図			50代	127.2× 50.3	絹本 着色	1幅
19	太秦牛祭図	明治30	1897	62	149.1× 53.0	紙本 着色	1幅
20	一咲戯筆帖	明治33	1900	65	各14.4× 24.3	紙本 淡彩・墨画	1帖
21	幽谷君子図	明治34	1901	66	135.2× 33.3	紙本 墨画	1幅
22	溪山勝概図			60代	187.2× 99.9	紙本 墨画	1幅
23	天保九如图			60代	206.3× 70.3	紙本 墨画	1幅
24	晃山勝区図			60代	各17.6× 23.4	紙本 淡彩	1帖
25	十六応真画像	明治39	1906	71	156.8× 71.0	絹本 着色	1幅
26	北野大茶湯図	明治40	1907	72	59.0× 183.7	紙本金地 着色	1面
27	椿石靈鳥図	明治40	1907	72	127.0× 108.5	紙本 着色	1面(衝立)
28	春日角伐図	明治40	1907	72	各24.1× 32.7	紙本 墨画	1帖
29	江山招隠図	明治42	1909	74	116.6× 42.2	絹本 着色	1幅
30	十六羅漢画巻	明治42	1909	74	19.4× 345.5	紙本 淡彩	1巻
31	山居静適図	明治44	1911	76	141.5× 41.8	絹本 着色	1幅
32	福祿寿図	明治45	1912	77	129.5× 52.0	絹本 着色	1幅
33	捕鯨略図	大正2	1913	78	各25.6× 40.6	紙本 墨画	1帖
34	華之世界図	大正3	1914	79	140.1× 41.6	絹本 着色	1幅
35	静観樂事帖	大正3	1914	79	各10.7× 25.3	紙本 着色	1帖
36	宇治勝景図			70代	16.5× 50.0	紙本 淡彩	1本(扇子)
37	巖棲谷飲図巻			70代	35.0× 340.3	絹本 着色	1巻
38	山居夜雨図			70代	径40.1	紙本 淡彩	1幅
39	竹窓聴雨図			70代	181.0× 114.2	紙本 墨画	1幅
40	通天晚秋図			70代	16.4× 53.0	紙本 淡彩	1面(扇面)
41	蝴蝶図	大正4	1915	80	16.5× 53.0	紙本 着色	1面(扇面)
42	休師訪ノ貫図	大正4	1915	80	129.4× 64.3	紙本 墨画	1幅
43	山居静観図	大正5	1916	81	152.2× 43.8	紙本 着色	1幅
44	遠山雪景図	大正6	1917	82	62.6× 37.4	絹本 淡彩	1面
45	遠山雪図	大正6	1917	82	17.4× 55.4	絹本 着色	1面(扇面)
46	日月三星無量寿仏図	大正6	1917	82	132.4× 32.2	紙本 淡彩	1幅
47	平安勝景図	大正6	1917	82	16.5× 51.0	紙本 着色	1本(扇子)
48	奈良八重桜図	大正7	1918	83	44.6× 56.0	絹本 着色	1面
49	大原邨婦図	大正7	1918	83	141.8× 52.1	絹本 着色	1幅
50	山高水長図	大正7	1918	83	142.6× 51.3	絹本 着色	1幅
51	八哥育児図	大正7	1918	83	19.8× 57.9	紙本金地 着色	1面(扇面)
52	朝晴雪図	大正8	1919	84	38.9× 52.3	紙本 淡彩	1幅
53	茂松清泉図	大正8	1919	84	153.5× 51.1	絹本 着色	1幅
54	福祿寿図	大正9	1920	85	131.5× 63.8	紙本 着色	1幅
55	蝸牛廬図	大正9	1920	85	124.8× 32.0	紙本 淡彩	1幅

番号	名 称	制 作 年	年 齢	寸 法	材 質・彩 色	員 数	
56	小化城図	大正9	1920	85	17.8×55.0	紙本 墨画	1幅(扇面)
57	溪山招隱図	大正9	1920	85	171.0×71.1	絹本 着色	1幅
58	溪居清適図	大正10	1921	86	146.0×40.0	紙本 着色	1幅
59	空山静境図	大正10	1921	86	141.2×41.0	絹本 着色	1幅
60	盆蘭図	大正10	1921	86	132.0×32.0	紙本 淡彩	1幅
61	天空海闊図	大正10	1921	86	16.5×49.0	紙本 着色	1本(扇子)
62	真愛山居図	大正10	1921	86	145.8×39.2	紙本 淡彩	1幅
63	仿米岳峙湍潭図	大正10	1921	86	各25.3×40.1	紙本 淡彩	1帖
64	補陀落迦山図	大正10	1921	86	146.1×40.6	紙本 着色	1幅
65	七福遊戯図	大正11	1922	87	141.6×41.3	絹本 着色	1幅
66	心遊仙境図	大正11	1922	87	131.9×33.7	紙本 着色	1幅
67	東坡閑居図	大正11	1922	87	131.3×31.8	紙本 淡彩	1幅
68	三尊窟靈蹟図	大正11	1922	87	168.6×42.9	紙本 墨画	1幅
69	東坡閑居図	大正11	1922	87	153.5×42.8	紙本 着色	1幅
70	南海普陀山図	大正12	1923	88	130.8×65.0	紙本 墨画	1幅
71	普陀落山觀世音菩薩像	大正12	1923	88	130.8×65.3	紙本 淡彩	1幅
72	青龍起雲図	大正12	1923	88	133.6×32.4	紙本 淡彩	1幅
73	双寿搗餅図	大正12	1923	88	129.5×33.2	紙本 淡彩	1幅
74	静居至楽図	大正12	1923	88	145.8×40.4	紙本 着色	1幅
75	武陵桃源図	大正12	1923	88	155.5×43.0	絹本 着色	1幅
76	水郷清趣図	大正12	1923	88	130.7×31.0	紙本 淡彩	1幅
77	吉祥聚叢図	大正12	1923	88	131.3×44.9	紙本 淡彩	1幅
78	山水図・蔬菜図	大正12	1923	88	各16.4×49.8	紙本 淡彩	2本(扇子)
79	寿老歎酔図	大正12	1923	88	176.1×48.5	紙本 淡彩	1幅
80	掃塵山荘図	大正12	1923	88	131.5×31.8	紙本 墨画	1幅
81	瀛洲僊境図	大正12	1923	88	135.3×51.5	絹本 着色	1幅
82	福内鬼外図	大正13	1924	89	131.9×32.9	紙本 淡彩	1幅
83	巖栖十八羅漢圍碁図	大正13	1924	89	144.6×39.2	紙本 淡彩	1幅
84	花中君子図	大正13	1924	89	39.0×62.0	絹本 着色	1面
85	鶯宿梅図	大正13	1924	89	16.6×53.8	紙本 淡彩	1面(扇面)
86	瓶菊図	大正13	1924	89	16.6×53.8	紙本 着色	1面(扇面)
87	水墨清趣図	大正13	1924	89	144.0×39.1	紙本 墨画	1幅
88	溪居読書図	大正13	1924	89	145.1×39.1	紙本 淡彩	1幅
89	蓬莱山図	大正13	1924	89	144.8×39.2	紙本 淡彩	1幅

[粉本]

番号	名 称	制 作 年	年 齢	寸 法	材 質・彩 色	員 数	
90	北野大茶湯図巻	明治15	1882	47	31.1×535.3	紙本 淡彩	1巻
91	牛祭覚描き帖				27.5×37.7 <small>など</small>	紙本 着色・墨画	1帖

・出品作品は期間中下記の通り2回にかけて展示します。但し一部作品は重複することがあります。

前期 10月4日(火)～11月6日(日) 後期 11月9日(水)～12月11日(日)

・下記の日程で学芸員による展示説明会を行います。

10月15日・29日、11月12日、12月3日 各土曜日の午後1時30分より

・次回展覧会 「鉄斎 ― 売茶翁没後250年によせて ―」

平成24年1月8日(日)～3月18日(日)

清荒神清澄寺 鉄斎美術館 〒665-0837 宝塚市米谷字清シ一番地  
TEL (0797) 84-9600  
FAX (0797) 84-6699  
<http://www.kiyoshikojin.or.jp>